

THE BIG-O

CD THEATER

WALKING TOGETHER ON THE
YELLOW BRICK ROAD

第二稿

脚本／小中千昭

Play by Chiaki J. Konaka

2000／06／22

登場人物

ロジャー・スミス(25).....	ネゴシエーター
ノーマン・バーグ(54).....	ロジャーの執事
R・ドロシー(18).....	アンドロイド
エンジェル(26).....	異邦人
ダン・ダストン(47).....	軍警察少佐

このドラマは、中ホール程度の小屋で上演される、演劇の録音の様に聞かせる意図で書かれている。

舞台はロジャー邸のピアノ・ホール。

台詞は室内のアンビエントを伴って聞こえる。また、俳優の動きも感じとれる生々しさが欲しい。

開幕、閉幕時の拍手も、リアルなものが望ましい。

俳優の演技は、アニメーションの時と同じトーンで良いのだけれど、場面によっては、舞台上演している——というニュアンスを強く出した方が効果的かもしれない。

意味が変わる範囲を越えなければ、言い換えは自由である。

ロジャーの部屋

2ベルが鳴り、さざ波の様なざわめきが静まる。

M (サククス&ピアノ)

ロジャーの声流れる(録音)。

ロジャー「(モノ)私の名はロジャー・スミス。この記憶喪失の街には必要な仕事をしている。

パラダイム・シテイは記憶喪失の街。この街の人間は、十年前のある日を境に、それ以前の記憶を全て失っている。しかし、それでも人間というのは何とかしていくものだ。(曲長に合わせ、間)

どうすれば機械が動き、電気が得られるのかさえ判れば、過去の歴史など無くとも、文化とやらは装える。

過去に何があったのか、何が無かったのか。気にせず生活だつて出来る。いや、そう努力してきたのだ。記憶を失って哀しんでいるのは、この街の老人だけだ。しかし——、メモリーは悪夢の様に、いきなりその姿を現す時がある——」

緞帳開く。

そこはロジャー邸の広い居間。

聞こえだすピアノのポロネーズ。舞台奥で、ピアノを弾いているR・ドロシー。

ロジャー「(オフ)ドロシー！ R・ドロシー・ウェインライト！」

上手ドアを開け、入ってくるロジャー。

ピアノを弾き続けながらドロシー

ドロシー「どうしたの？ ロジャー。今私が弾いているのは、あなたを目覚めさせる曲じゃないわ」

ロジャー「そんな事を言っているんじゃない！ 君は知らないのか！」

ロジャーは部屋をうろつろしながら喋っている。

ドロシー「何の事を言ってくれなければ、あたしが知っているか知らないかを答える事は出来ない——」

ロジャー「(苛々と)いいか！ いないのだよ！ いなくなつて

しまったのだ！」

ドロシー「だから、何がいないというの」

ロジャー「決まってるじゃないか！」

ドロシー「ノーマン？」

ロジャー「違う！ ビッグオーだ！」

暫く、ドロシーのピアノだけが聞こえる。

ドロシー「——ビッグオーが、いないの……？」

ロジャー「（嘆息）だから、そう言っているじゃないか」

ドロシー「あなたが動かしていないのに、勝手にビッグオーが動きだしたってどういうの？」

ロジャー「ああ。前にもそういう事があった。その時には、君が乗っていたんだ」

ドロシー「でも、私は今、ここにいてあなたと喋っているわ」

ロジャー「（気落ち）そう、だ……。どういう事だ……」

ドロシー「ノーマンは？ あの人はどうしたの？」

ロジャー「探したさ屋敷中！ しかし、出かけている様だ」

ドロシー「ノーマンがビッグオーをお散歩に連れていったという

可能性は考えられない？」

ロジャー「考えたくもない！ 彼が！ この私に！ 何も告げないままだな！」

ドロシー「少し落ち着いたら？ ロジャー・スミス」

ロジャー「落ち着けたと」この私が落ち着いていないとでも言うのか君は」

ドロシー「ネクタイの結び目が緩んでいて、前髪が乱れているあなたを見て落ち着いていると思う人はいない」

ロジャー「落ち着いていられると思うのか」

ドロシー「——ロジャー」

ピアノの音、止む。

ロジャー「——なんだ」

ドロシー「——ビッグオーがいなくなってしまう事は確かに大変な事だけれど、あなたの取り乱し様は不自然だわ」

ロジャー「どうしてだ」ビッグオーがいなくなったのだぞ！こ

れ以上の取り乱す理由があるなら教えて欲しいものだ！」
ドロシー「だって」

ロジャー「何だ！」

ドロシー「今すぐ、ビッグオーで出ていかなくてもはいけない事件が起きている訳ではないわ」

ロジャー「起こってしまった時の事を考えているんだ私は！」

ドロシー「そうかしら」

ロジャー「どういう意味だ。何を言いたいドロシー」

ドロシー「あなたにとって、ビッグオーは一体何？」

ロジャー「——」

ドロシー「かけがえのない程愛している、とは思えない」

ロジャー「そういう表現は全くなさずれだ」

ドロシー「グリフォンが無くなってしまっても、あなたがそういう反応をするかしら」

ロジャー「車とメガデウスと一緒にするのか、アンドロイドの思考は！」

ドロシー「……」

気まずい間に、ロジャー、咳払い。

ロジャー「とにかくだ。プレーリードッグごと、ビッグオーは地下のどこかへ消え去っているのだ。

(嘆息) どうしたらいい。どうやって探せばいいのだ……

……」

ドロシー「呼んでみたの？」

ロジャー「えっ……」

ドロシー「あなたの左腕の時計で、呼んでみたの？」

ロジャー「——なんていう事だ。こんな簡単な方法すらも忘れるとは——、確かに私はどうかしていた様だ。ありがとう

ドロシー「

カチリ、と時計に手を添える音——。

ロジャー「ビッ——」

がちゃん。下手よりドアの音がする。

サスの位置に入ってくるノーマン。(ノーマンは以降、常にこの位置に立つ)

ノーマン「ロジャー様。お客様がお見えでございますが」

ロジャー「のっ、ノーマン！ いったいどこへ行っていったん」

ノーマン「は？ わたくしでございますか？ ずっと調理場の方

にありましたけれども」

ロジャー「そんな筈はない。さっきドックから何度も呼んだし、私自身調理場も探したのだ。君はいなかった」

ノーマン「変でございますなあ。今夜の御夕食にはパイ包みのターキーをと思ひまして、ずっとオーブンの側から離れずにおりましたのです」

ロジャー「そんな事はいい！」

ノーマン「は？」

ロジャー「君は知らないのか！」

ノーマン「何が、でございますか？」

ロジャー「なくなっている事だ！ あのビツ——（はっ）」

ノーマン「び……？」

ロジャー「客、と言ったな」

ノーマン「左様でございます。軍警察のダストン少佐がロジャー

様にお目に掛かりたいと」

ロジャー「こんな夜に一体何だというのだ」

下手ドアを開け、足音を響かせ入ってくるダストン。

ダストン「いつまで待たせるつもりだね」

ノーマン「おお、困ります、勝手に入っていただいては」

ロジャー「ノーマン、いい」

ノーマン「——は」

ダストン「あ……、ご機嫌よう、お嬢さん」

ドロシー「こんばんは。ダストン少佐」

ロジャー「アンドロイドには礼儀正しいのだな」

ダストン「あ、いや別にそういう……その——」

ロジャー「すまないが、ちょっと待っていてくれないか。ノーマン

ノーマン「は……？」

二人、下手より部屋を出ていく。

後に残るダストンとドロシー。

ダストン「——ピアノ、弾けるのかね」

ドロシー「……」

ドロシー、バラッド曲を弾きだす。

（既存曲のピアノトラックのみ抽出？）

ドロシー「——バラッドがお好きなのかしら」

ダストン「——いや……、音楽の趣味なんてないさ。ただ、その曲が——、自分の奥にあるドアをノックする気がしてね」

ドロシー「メモリー……？」

ダストン「自分のメモリーなんぞ、大したもんじゃない。自分はずっと今の様な生き方しかしてこなかっただろうさ」

ドロシー「……」

ダストン「そのピアノ……」

ドロシー「え？」

ダストン「練習したのかね」

ドロシー「——いいえ。私の持っているメモリーがこれを弾かせるの」

ダストン「君の——、メモリー？」

ドロシー「そう。ドロシー・ウエインライトという、私のモデルになった、ずっと昔に死んだ女の子のメモリー」

ダストン「——そうか……」

暫く黙る二人。

バラッドを弾き続けるドロシー。

ダストン「——不安に、ならないか……？」

ドロシー「え……？」

ドロシー、ピアノを止める。

ダストン「あ、いやすまん。変な事を聞いた」

ドロシー「……」

ダストン「あんたは——、その、確かによく出来ている。芸術品とでもいうのかな……」

ドロシー「ほめて下さっているのね。ありがとう」

ダストン「いや……。だからその、つい錯覚しちゃうんだ。あんな

たがまるで——」

ドロシー「私は人間とは違う」

ダストン「ああ。判っているさ。あんたと最初に会って、あんたの身体を抱えた時に思い知らされた。（乾いた笑い）」

ドロシー「私はその時の事をおぼえていない……。でも、ごめんなさいと言っておくべきかしら」

ダストン「——覚えている事と、覚えていない事——。メモリー

を持つている事、持っていない事——。持っていないメモリーに、いつも背中から脅かされている様な気分を抱き続けている——。いったい何が違う……」

ドロシー「え……」

ダストン「——（調子を変え）ロジャー・スミスは——、どうしたんだ？」

と、ドア外でオフで聞こえるロジャーとノーマンの声。

ノーマン「（オフノうるたえ気味）こんな事、わたくしも初

めてでございます。如何いたしましょうロジャー様」

ロジャー「（オフ）とにかく——（以下、声が低まる）」

ダストン「どうやら取り込み中の様だな。出直して来た方が良さそうだ」

ドア開き

ロジャー「ダストン、待たせてすまなかつた。用件は一体なんだね」

ダストン「いや、また今度にしよう。今夜はそちらの都合が悪そうだ」

ロジャー「——というと、今日は軍警察少佐として来た訳ではないと？」

ダストン「かつてあなたの上司だった立場で来ている訳でもない」

ロジャー「（小さく嘆息）まさか、友人として来たとでも？」

ダストン「そこまで言うつもりはないが、酒でも一緒に飲みながら話したい時だってあるさ。しかし今夜はやめておく。

邪魔をしたな」

出ていきかかるダストン。

ロジャー「ダストン」

ダストン「ん」

ロジャー「確かに今私はしなくてはならない事がある。しかし、友人ではないものの、多少の因縁がある人物が困った顔のままこの私の場所から出ていくのは我慢がならない」

ダストン「（苦笑）そういうところは変わってないんだな、ロジャー」

ロジャー「ドロシー、遠慮してくれ」

パタンとピアノの蓋が閉じる。

ダストン「いや、その必要はない」

ロジャー「しかし——」

ダストン「あんたが戻ってくる前、そのお嬢さん、いやその、ア
ンドロイドと——」

ドロシー「別に気を悪くしていないわ」

ダストン「——ドロシー。そうだな。素直にそう呼べばいいのか
……。ドロシーとちよつとその話をしていただ」

ドロシー「——メモリーの事……」

ロジャー「厄介そうだな……。ノーマン！」

ノーマン、サスに入って

ノーマン「お呼びでしょうか」

ロジャー「客人にバーボンを」

ノーマン「かしこまりました（退く）」

ダストン「——すまん」

ロジャー「例えパラダイム本社番犬と蔑まれようとも、ドーム
の連中を守る仕事に誇り持っている君へ、メモリーにと
らわれて眠れない夜が来ようとは意外だったからね」

ダストン「故意には知らんが、大きな間違いがあるぞ、ロジャ
ー・スミス。軍警察が守っているのはドームの中だけじ
やない。このパラダイム・シティに生活する全ての人間
だ」

ロジャー「それは越権、という奴じゃないのかな。規定では——」

ダストン「規定なぞ糞食らえだつ。おつと、失礼、ドロシー」

ドロシー「お構いなく」

ダストン「——お前さんが出て行った時の話を蒸し返すつもりは
ない」

ロジャー「ああ。状況は何も変わってやしない」

ダストン「そう、変わっていない。しかし、この先もずっとそう
なんだろうか……」

下手ドアが開く音。

ノーマン「お待たせをいたしました」

ロジャー「（近づいて）ありがとう。後は私がやるからいい」

ノーマン「左様でございますか。では」

ロジャー、グラスを持ってダストンに近づく。

ダストン「——ああ、すまん」

ロジャー「私も飲みたいところだった」

ドロシー、ピアノを弾き始める。

暫く黙ってグラスに口をつけているダストン。

それを見つめているロジャー。

ダストン「メモリーなんて最初から無かった、そう思えたらどん

なに楽だと思わないか」

ロジャー「え……」

ダストン「俺は——、謂われ無き暴力が平和を脅かす時、武力を

用いて対決する事は正義だと信じている」

ロジャー「——」

ダストン「俺はな、ずっとこう考えてきた。軍警察は、メモリー

が失われる前は、パラダイムの経営する機関などではな

く、もつとその——」

ロジャー「つまり、あなたが思い描く理想的な軍警察の姿だった

と言いたいだね。護るべきは、パラダイムの資産では

なく——」

ダストン「そう思えるからこそ、俺は自分の仕事に誇りを持って

これた。こんな事、人に話すのは初めてかもしれない」

ロジャー「——それでいいじゃないか」

ダストン「——」

ロジャー「失われたメモリーは、いずれ取り戻されるだろう。そ

れを望まなくても、そうする者は絶対に現れる。しかし

それはあくまでメモリーなんだ。過去の亡霊だ」

ダストン「（呟く）亡霊……」

ロジャー「今ここで、こうして生きているのは我々だ。過去の亡

霊ではない。過去がどうであつたかと、今、自分がどう

生きていくべきかは別のものだ」

ダストン、声を殺して、乾いた笑いを漏らす。

ロジャー「——」

ダストン「いや、立派だよ、お前さんは。確かにそうなんだろう」

ロジャー「——」

ダストン「お前さんのその生き方は見事さ。感服するぜ。しかし

な、俺の様な、普通の人間はそうはいかないって事を知
つておいても損はないだろうよ、ネゴシエーターさん」
ロジャー「（慄然）私は別に自分の生き方を人に強いるつもりは
ない」

ドロシー「そうね。だってロジャーも時々、最低な気分寝起き
をしてノーマンや私に当たったりするものね」

ダストン「あ？ どういう事かね、ドロシー？」

ロジャー「ドロシー！」

ドロシー「夢を見るのよ。メモリーの断片の」

ロジャー「やめないか！ 人の事をペラペラと喋るものじゃない
！」

ドロシー「ダストン少佐は自分の事を包み隠さず喋っているわ。

フェアじゃないと思うの」

ロジャー「私がフェアじゃないだ」とこつ、この私がフェアで
はないなどとよくも——」

ダストン「（笑）まあまあまあ。それくらいにしてくれ。これで
も一応は客のつもりなんだ。家族の喧嘩は俺が帰ってか
らにしてくれ」

ドロシー「家族……」

ロジャー「そういうもんじゃないよ、この私とドロシーは——」

ダストン「兄と妹——」

ロジャー「——」

ダストン「の様に见えていたが、それも違う様だな。時にはドロ
シーの方が姉の様に思える時もある」

ロジャー「——」

ダストン「しかし、やはりそれとも違う。まあいい。俺は無粋な
人間だね。男と女の関係は俺にはメモリー以上に判らな
いものさ」

ロジャー「——確かに——、私だって悪夢を見る。それは紛れも
なく、過去のメモリーの断片なのだろう。

それに……」

ダストン「——？」

ロジャー「今のこの私にとって大事なもの——、私を私と思わせ
てくれる存在——、それはメモリーそのものだとも言え

る……」

ダストン「それは——、何の事だ……?」

ドロシー「(やや心配) ロジャー?」

ロジャー「存在そのものがメモリー——。そういうものが、この街には時に現れる」

ダストン「——メガ、デウス——の事を言っているのか……?」

ドロシー「ロジャー、わた——」

ダストン「まさか、お前さんが言おうとしているのは——」

ロジャー「私はフェアを重んじる人間だ。そして私は、そのメモリーがもともといかなるものであったか、どういう目的で作られたものなのか——、それとは無関係ではいられない。しかし、それでも私は、今の私が正当であると考える理由でその存在を認めるのだ」

徐々に語調を強めていくロジャー。

ダストン「——」

ロジャー「恐らく、いや、間違いなく、過去のメモリーは、今の我々の世界そのものを破壊する程に強大なものだった。

だから、過去のメモリーを、過去にあったのと同じ様なものとして今に蘇らせる事は救せないのだよダストン！」

ダストン「ロジャー、スミス……。君は——」

ロジャー「過去の亡霊を呼び起こす者達——、それが私の敵なのだよ！ 軍警察？ そんなものが一体どれだけの力を過去に持てたというのだ！ もし君の思い描く理想の姿で軍警察が存在していたなら、どうして！ 何故我々のメモリーは失われたのだ！」

ドロシー「(静かに、厳しく) ロジャー、やめて」

ロジャー「本当の敵を知りたまえダストン！」

ダストン「(静かに) 何だと?」

ロジャー「それはベックの様なチンピラなどでは当然ない！ 勿論あの、メガデウスを掘り起こす事のみには心を支配された哀れなる探求者、シュヴァルツバルトなどでもない！」

エンジェル「(下手袖よりオフ) では、アレックス・ローズウォ

ーターだと言いたい訳？ ミスタ・ネゴシエーター」

驚き、注視する一同。

下手より現れるエンジェル。パーティーの帰りなのか、美しく着飾ったドレスが少し着崩れている。

ロジャー「え……、エンジェル……」

ドン！ ササササササ……。

砂時計を返した音。

ロジャー「（抑えて）ドロシー。行儀が悪いぞ」

ダストン「ええと、あなたは確か会った事があるな。パラダイムの――、アレックスの秘書……？ いや違う……。軍警

査問委員の――、ああいや（混乱）、アウト・オブ・

ドーム・ボランティアの――」

ドン！ ササササササ……。

砂時計を返した音。

ロジャー「このレディが幾つの名前と幾つの肩書を持っているかはこの私にも判らないがな。ノーマン！」

サス下に来るノーマン。

ノーマン「はいロジャー様」

ロジャー「この屋敷のルールは心得ているな」

ノーマン「勿論でございますともロジャー様。一つには、この屋敷で暮らす者は黒い服を着る。ええ、もう一つには、若い女性の訪問者は、すぐにお通しする――」

エンジェル「（くすくす）ありがとう、ノーマン」

ノーマン「どういたしまして」

ドン！ ササササササ……。

砂時計を返した音。

ロジャー「よさないかドロシー！ いやええとノーマン、この女性は例外だ」

ノーマン「は？ その様なルール、初耳でございますが」

ロジャー「今からそうなったのだ。覚えておいてくれ」

ノーマン「（府に落ちない）はあ、心得ましたでございます。ではわたくしはこれにて」

立ち去るノーマン。

エンジェル「（やや酔っている感じ）パーティーを開いてるんだったら誘ってくれなきゃ。それくらいのお付き合いはしてると思っただけ？ ロジャー・スミス」

ロジャー「——ここじゃ開いてはいないが、君はその帰りの様だな。酔い足りなくて寄り道するつもりだったのなら、ここは場違いだ」

エンジェル「紳士にしてはちつとも勧めて下さらないけど、座ってもいいわよね。あたし、少し疲れているの」

舞台中央のソファに沈むエンジェルの身体。

エンジェル「靴も脱がせてもらうわ」

靴を脱ぐエンジェル。

ロジャー「私は女性の靴に特別な関心を持たないが、そのルビイの様な色の靴は、女性が履いてこそ映えると思うよ」

エンジェル「お行儀悪いのは判ってるわよ。けどこの新しい靴、あたしも気に入って買ったんだけど、ちょっと小さかったみたい。疲れちゃったわ」

ロジャー「(苛立ち)君は！ここを一体どこだと——」

ドロシー、おもむろにブルーズ・ピアノを弾き始める。(成り行きで曲終わりまで)

ロジャー「(嘆息)なんて夜だ……」

ダストン「ほう、ドロシー、そういう曲も弾くのかね」

ドロシー「そういう気分の時もあるの」

ダストン「気分……？」

ロジャー「気にしないでくれダストン。時々そういう事を言つて

戸惑わせるのだよ、このアンドロイドは」

エンジェル「(クス)なんか怖いわ、あの子の目」

ロジャー「知らないのかね。アンドロイドは、心に疚しさを持つ人間を見抜くのだという事を」

エンジェル「(大笑い)それじゃ——、さぞかし(堪えるのに必

死)——あたしの事——、怪物みたいに見えるでしょ

——(笑いを噛み殺す)」

ダストン「(怪訝)——おい、ロジャー……。俺は今の話、初耳だが、本当に、その、アンドロイドって……」

ドロシー「私に判るのは、ロジャーが大嘘つきだって事よ」

ダストン「——(ホツ)なんだ……」

ドロシー「それだけでもないけれど……？」

ロジャー「今はよしたまえ、ドロシー。ところでミス——、今夜

「は一体何て名前なんだ？」

エンジェル「ヤだわ。いつも通り、僕の天使 って呼んでくれればいいのに」

ドロシー「『この糞いまいましい堕天使め』、の間違いだわ」

ロジャー、深い嘆息。

ダストン「（咳払い）ああドロシー。いけないな、そういう言葉遣いをお嬢さんがしては」

ドロシー「失礼。気にしないで」

ロジャー「（力抜け）一体何の用事なんだね」

エンジェル「用事なんて必要？ あたしとあなたの間で」

ロジャー「いい加減にしたまえ！ 飲みすぎてる様だな」

エンジェル「——ついね。今、アレックスのパーティーに出ているのよ……」

ロジャー「——ほう」

エンジェル「出席する筈の無い、父親、ゴードン・ローズウォーターのバースデイ・パーティ。（鼻で呷う）滑稽でしょ」

ロジャー「あの老人の……」

エンジェル「ゴードン・ローズウォーターは四十年前どころか一昨日の記憶すらも持たず、日がなああの専用ドームの農場で、嘘の太陽の温かい光を浴びて幸せに暮らしているわ。そこから出てくる必要なんてないのもの」

ロジャー「——そう、かな……（Act:13参照）」

エンジェル「あら……？ あなた、ゴードンについて何か他に知っている事でもありそうね」

ロジャー「いや、別に」

エンジェル「——まあいいわ……。ゴードンが何かを四十年前にしたとして、今あの哀れな老人には何も出来ない。この世界を変える事はおろか、メモリーを取り戻す事だつて」

ダストン「——失礼だが——」

エンジェル「なあに？ 軍警察の少佐様？」

ダストン「あなたも、メモリーを求めている——、そうですね」

ロジャー「ああ、さつき挙げた連中とは理由が違う様だが、メモリーを得る為に手段を選ばないところは同じだ」

ライターの点く音。

エンジェル、深く煙を吸う。

ダストン「手段を、選ばない……」

ロジャー「ダストン、彼女を調べたらいい。果たして彼女がこのパラダイム・シティで生まれたかどうか——」

ダストン「——外の、世界……から来ていると？」

エンジェル「案外とお喋りなのね、ネゴシエイター」

ダストン「（深い嘆息）」

ロジャー「——すまないダストン……。悪い事を思い出させてしまった様だ」

ダストン「——俺が唯一持っている四十年前のメモリー——、映画館でスクリーンを見つめている、俺と、もう一人俺より小さな女の子——。

スクリーンに映っていたのは、美しい外の世界の女だった。そして——、その女は、四十年前のフィルムの中と全く同じ姿で俺の前に現れ——、死んだ……」

エンジェル「——人ごとみたいな言い方ね……」

ダストン「知っているのか？ 俺が——、この手で——」

エンジェル「あたしは何も知らない。ここではそういう関係なんでしょう？ ロジャー・スミス」

ロジャー「——都合が良すぎるとは思わないか」

エンジェル「少なくとも、あたしとは関係がないのよ、外の世界から来たアサシネーターなんて。人を殺してこの世界が変わるなんて愚かな考えだわ」

ロジャー「今夜は君もお喋りだな、エンジェル」

エンジェル「——そうね……。どうしてあたし、ここに来ちゃったんだろ……。勘違いしないで。あなたに恋なんてしてないから」

ロジャー「願うところだ」

ダストン「——、聞いてもいいか」

エンジェル「あたしに？」

ダストン「外の世界って一体何だ。いや、パラダイム・シティがこの世界の全てだなどと思っていない。しかし、この街の外に、この様な街が残っているとは、我々の様な文化を維持している人々がいるとは、誰も思っていなかった

のだ」

エンジェル「——そうかしら」

ダストン「どういう事だ」

エンジェル「そう思っていないかった、ではなく、そう思わない様にさせられてきた、とは考えられない？」

ダストン「（呻く）」

エンジェル「メモリーっていうのは、四十年前に失われたものばかりじゃない。偶然に無くなってしまった筈がないわ」

ダストン「——誰かが、俺たちのメモリーを操作していた……」

ロジャー「君がどこから来て、何の為にメモリーを掘り起こそうとしているのかは知らないが、君のメモリーに対する考えだけは共感する。それは絶対なものではない。今、ここで生きている我々が克服すべきものでしかない」

エンジェル「（笑みを漏らし）ありがとう、ロジャー・スミス」

ロジャーも笑みを返す。

暫くの沈黙があつて——

ダンニ 鍵盤を激しく叩く音。

ドロシー「たくさんだわ！」

息を呑んで注視する一同。

ドロシー「（激しく）メモリーがそれほど大事……あるかどうかも判らない、目に見えないものに縛られるなんて——、人間てなんて滑稽なの……」

ロジャー「ドロシー……」

ドロシー「そうよ！ 今のあたしだつておかしい！ あたしがピアノを弾けるのだから、あたし自身のメモリーがあるからだわ！ あたしの思考がこんなに乱れ、制御機能がおかしくなっているのだから、あたしに心があるからなかじゃない！ あたしのモデルになったドロシー・ウエインライトという人間の思考プロセスがメモリーの中にならずといつまでも居座っているから起こる、あつてはならないバツファー・エラーなのよ！ こんな事をあたしに起こさせる人間のメモリーなんて、あたしは——！」

エンジェル「（心配）——この子……」

ドロシー「あ——、あたし……、こんな、こんな気持ちになつて

いるのに、涙すら出ない——」

ダストン「（穏やかに）俺は、人間でしかない。だが、あんたの気持ちは、今のあんたの気持ちは判るつもりだよ」

ドロシー「……」

ロジャー「その通り、私たちはメモリーという目に見えないものに縛られ続けている。四十年前の事だけではなく、生きていく限り、メモリーというものは、常に上書きされていく。しかし、完全に消え去る事はない……」

エンジェル「縛られてる——と言われるのは心外だけれど……、そうね……。あたしたちにはそれが欠けていて、それを埋めたいと思っている——。それだけが共通点」

ドロシー「——（落ち着き始めている）私は……、この世界に突然現れた。父と呼ぶべき人はいたけれど、私がこの世界で自我らしきものを得たのは、その人がもたらしてくれたからじゃない。

私はたった一人——、この世界に現れた……。人になりたい、なんて思わない。だけど、あたしは人を真似するだけの機能の存在……」

やや間。

エンジェル、立ち上がり、

エンジェル「この靴、あなたにはちよつと大きいかしら」

ドロシー「え……」

エンジェル「——あたしが子どもの頃——、こんなお話を聞かされた事がある……」。

小さな女の子が、ものすごい竜巻で吹き飛ばされてしまふの。住んでいた小さな町から、遙か遠い、不思議な世界へ飛ばされてしまふ……」

ドロシー「どんな、世界……？」

エンジェル「その女の子にとっては見るものも触れるものも全てが不思議なの。」

そこで、女の子は三人の友達を作る。一人は——、ええと、細かいところは忘れてしまったわ。みんな人間ではないの。だけど、それぞれ、人間の様な心の何かを失っている……。勇気とか——、知恵とか……」

ドロシー「メモリー……」

エンジェル「女の子は自分のお家を失っているわ。四人は一緒に黄色い煉瓦の道を歩いて、その世界を支配する、誰もその姿を見た事のない大魔法使いに会いに行くの」

ロジャー「……まるで、誰かの様だな……」

エンジェル「だけど、その魔法使いは、実はただの臆病な人間でしかなかった……」

ダストン「——それで……、どうなった？」

エンジェル「忘れちゃったな……。このお話、聞いた事、ないかしら？ あたし、このお話が生まれたところへ行きたい、つて——、ずっと……」

やや、間。

エンジェル「（調子を変え）あ、あのね、ただ、その女の子がどうやって自分の世界へ戻ったかだけは覚えているわ。

ドロシー。その靴を履いてみて」

ドロシー「——」

靴をはくドロシー。

エンジェル「（苦笑）黒いドレスに、その靴は似合わないわね。

でも——、たまにはそういう鮮やかな赤い色の服を着てみたらいいわ。あなたの髪の色、とっても綺麗なもの」

ドロシー「——どうやって、帰ったの……？ その女の子」

エンジェル「靴の踵と踵をね、1、2、3、と三回鳴らすの」

ロジャー「やってみたまえ、ドロシー」

ダストン「——しかし……」

ロジャー「いいからやってみたまえ。魔法は働く。私が保証しよう」

エンジェル「え……？」

ドロシー「私、やってみるわ……」

ドロシー、おずおずと——、

カツ カツ カツ……。

踵が鳴った。

静寂。

ドロシー「——何も、起きないわ……」。

当たり前だわ。あなたが話してくれたのは——、ただの

子どもに聞かせる——お話なんだもの（哀しみ）。

こんな……、こんな事に保証をするなんて、ロジャー、ネゴシエイターとしては——軽率だわ……」

ロジャー「魔法は起こっているさ、ドロシー」

ドロシー「え……？」

ロジャー「——いや、君が、魔法を起こしたんだ」

ドロシー「……」

ロジャー「私たちは、どこかのお伽話に登場する、人間の様で人間ではない三人と同じだ。メモリーという、我々が失ったものをそれぞれに自らの欠落だと考えている。私自身にとつてそれはより具体的な存在を示していた」

ダストン「——さっきの話か……。お前さんにとつての、存在と
してのメモリー……」

エンジェル「何の事……？」

ロジャー「仮にそれを私はビッグオーと呼ぼう。

これは私が話すもう一つのお伽話だ」

じつと固唾を呑みロジャーの言葉に耳を傾ける三人。
ロジャー「ある男がそれと出会ったのは、ただの偶然だと最初は思っていた。しかしそうではない事を彼は思い知る。

彼は、その見知らぬ筈の巨大な姿をした存在を、彼が思う通りに動かす事が出来た。彼は予めそれに乗り込む事が予定されていたのか、そうでなければ——、彼自身が知らない彼のメモリーがそうさせているのだろう」

エンジェル「（薄笑）面白いお伽話だわ」

ロジャー「しかし、それが本当のところどうであるのかは、今の彼にはどうでも良い事なのだ。私が——、今の彼の考えで、その存在——、ビッグオーをどう使うべきなのか。それが彼にとつて、真剣に考え、行動しなければならぬ事なのだ」

ダストン「正義を司る神——、それを気取るつもりかね」

ロジャー「当然その答えはノーだ！ 私はビッグオー、そして他の巨大なロボット達をメガデウスと呼ぶ事を好まない。しかし——、あの強大な力を持ったあのメモリーの中の存在を産み出した人間達——、仮に人間だとしてだが、

彼らが神を作ろうとしたのではないか、とは思う時がある」

エンジェル「（含み笑）彼、じゃないの？」

ロジャー「いや、私がそう考えるのだよ、エンジェル。」

そういった人間の心を、ビッグオーが理解しているとは思っていない。だが、あのビッグオーもまた、取り残された存在なのだ――。そう、彼自身のメモリーもまた欠落している。

ドロシー。君がさっき私たちの前で見せた感情――、君はリアクションだというだろうが、それはやはり、君自身の気持ちなのだよ」

ドロシー「え……」

ロジャー「人間になる必要などない。君は君自身であり、君の中で起こる気持ちは君自身のものなんだ。その事を、君は私に教えてくれた」

ドロシー「――理解出来ないわ、ロジャー。それは全く論理的ではない」

ロジャー「ロジックではない。人も、アンドロイドも、そしてメガデウスも――、何かを欠落させて今ここに存在している。それを求め続ける事が、生きていく証だと、私は思うのだよ」

エンジェル「それが――魔法……？」

ロジャー「そうとも。私は先程まで、メモリーそのものと呼ぶべき存在が消え去ってしまったと思っていた。しかしそうではないのだ。私が、それを求める気持を失いかけ、その力にのみ頼る弱い気持ちになった時、それは存在し得なくなるのだ」

ダストン「――では、今は存在するのだな」

ロジャー「（声高に宣言する）するとも！」

ピキーン！ 腕時計に触れる音。

ロジャー「ビッグオー！ ショウタイム！」

ズズーン

低い唸りが響き渡る。

エンジェル「（やや怯え）え……、何が起ころうとしているの？」

“Sure Promise”が鳴り響く。

ドロシー「ビッグオー……」

ダストン「メガ、デウス……、いや、ビッグオーが、ここに……」
ロジャー「そうとも！ このお伽話にはまだ結末がない。」

私はビッグオーと共に、闘う！」

SEノコクピット内ノイズ

エンジェル「（声を抑え）——どうしても、闘うのね……」

ロジャー「そうだ！ 過去のメモリーが亡霊なのではない！

それを呼び起こし、過去の破滅を再び蘇らせる存在こそ
が亡霊なのだ！ その存在が誰であれ、私は闘う！」

ダストン「——俺は——、軍警察の誇りを胸に、俺の信じる道を
いく。その道の先では、お前さんと闘う事が、あるかも
しれない」

ロジャー「それでいいのさダストン！」

グイ！ レバーを引く音がして——

ふっ、M、SE、同時にカットアウト。

ロジャー「ビッグオー！ アアクション……」

下手ドアの開く音がして、ノーマン、サス位置に。

ノーマン「そろそろ夜も更けて参りました。大変申し訳ございま
せんが、わたくし朝も早いものですから、先に失礼させ
ていただきます。ロジャー様の寢室に、チョコレートと
ミルクをご用意しておきました。では、お休みなさいま
し、皆さま」

一礼して退こうとしてノーマン、ロジャーに近づき
ノーマン「あ、ロジャー様——（小声）ビッグオー、戻っており
ます」

ロジャー「——ああ……」

ドアが締まる。

気だるい吐息が、それぞれから漏れる。

咳払いして立つダストン。

ダストン「——ああ……、すっかり長居しちまったな……。俺も

引き上げよう」

エンジェル「酔いが覚めちゃったわ……。もう開いてるお店、な
いかしら……」

ダストン「あ……。裸足で帰るのかね？」

エンジェル「（微笑）送って下さるのね。優しい方だわ」

ダストン「（ややうるたえ）えっ？ あ、ああ……。判りました」

エンジェル「じゃ、またね、お嬢ちゃん」

ドロシー「……」

エンジェル「ロジャー・スミス——（投げキス）」

ダン！

ひっくり返された砂時計が、サラサラと音をさせる。

下手ドアが締まり、二人きりとなる部屋。

ドロシー「——ロジャー……」

ロジャー「——おかしな夜だったな、ドロシー……」

ドロシー「この靴、私には大きいわ」

鳴り出す“*And Forever...*”のイントロ。

起こる拍手——

全幕終わり